

# 昭和が生んだ、なかにし礼

弟子丸博道

「ハルピン一九四五年」 なかにし礼

あの日からハルピンは消えた

あの日から満州も消えた

幾年 時は移れど

忘れ得ぬ 幻のふるさとよ 終末部分

なかにし礼は、一九三八（昭和十三）年、当時の満州国牡丹江市（現在の中国黒竜江省）で生まれた。幼少期満州に進撃したソ連軍から少年中西禮三は、ソ連の捕虜となり労役のはてに父を失い、母と姉とともに生死をさまよい命からがら逃げのび引揚者として、自らは倭僑として日本に帰還する。

この時の壮絶な戦争体験が、作詞家としてその詩や、小説のルーツとなった。国は何ひとつ責任をとらないという現実を目の当たりにして、国家に対する不信任を抱き堅固な反戦という信念をもち、それを生涯貫いたのだ。

当時の日本軍部が指揮し、満州国という幻想の傀儡政権を統治した関東軍は、ソ連の侵攻を知るやいち早く逃亡し、日本から夢見て中国大陸に渡った開拓者たちは、居留民として見殺しにされ、人権も踏みにじられ、満州での終戦時の死者は総数二十万人とされている。

これは、広島での被爆犠牲者は約十四万人、長崎の原爆の死者が約七万三千人、つまり広島と長崎での被爆の死者の総数に匹敵する日本人が、大陸の幻の満州国で、偽装正義を翳した戦争で尊い命を墜としたという事実だ。

なかにしは、戦後となり、日本に家族とともに引き揚げた先は、父の故郷である北海道の小樽で少年時代を、そして兄のいた東京へと引越し、生活は貧しく苦学のなかでも、岩波文庫を全冊読破したと豪語するなかにしは、当時の流行歌が軍歌と同じ七五調であることに違和感をもった。

ちょうど高校卒業後、経済的理由で進学を諦め、働きながらいくつかのアルバイト先のシャンソニエで、アテネフランセに通学し仏語を勉強していたなかにしは、シャンソンの歌手たちの依頼を受け、腕試しで日本語の訳詩を手がける。

たとえば、エディト・ピアフ、ベコー、グレコほか多数のシャンソンを代表するフランス語歌を、いわゆる七五調ではない日本語に訳詩し創っては、生計を立てていた。

合格した立教大学に授業料が払えず退学した後、その得た収入で、再受験し、運よく同じ大学の英米科に進み二年生の時に仏文科が新設され、転部し大学では仏文学を学び、夜はシャンソンと訳詩にどっぷりとつかって、その数は千曲に及び、訳詩コンサートを開けるまでになった。

しかし、初めの結婚した相手との新婚旅行先伊豆下田のホテルで、石原裕次郎との運命的な出会いがあり、

「シャンソンなんかの訳詩はやめて、はやり歌を書きなよ」

という衝撃的な裕次郎のひと言で歌謡曲の作詩家に転身をはかる。

その後、昭和歌謡の黄金時代に入り、三度にわたる日本レコード大賞を獲得、周知のように一躍花形作詩家となった。しかし、その作詞の原点は、戦争体験であり、大陸で命をとした父であり、二十万人の英霊でもある。

たとえば、黛ジュンの歌ったデビュー曲「恋のハレルヤ」だ。

なかにしは、沖には僕らを乗せる引き揚げ船が浮かんでいる。あのときの感動に言葉を与えたらハレルヤが浮かんだ、という。

♪愛されたくて愛したんじゃない……

という歌詞は、愛するふるさと生まれ故郷の満州に対する恋歌を表現した。また、弘田三枝子の歌でヒットした「人形の家」では、

♪愛されて捨てられて、忘れられた部屋のかたすみ、

私はあなたに命をあずけた……

という歌詞にも、故郷を奪われた引揚げの体験の記憶がその通底にある。

この歌い出しの裏には、日本国民や日本政府から顔も見たくないほど嫌われるなんて……という思いが込められている。

「時には娼婦のように」は、きわどい歌詞で民放の要注意歌謡となったが、なかにしはあえて放送禁止歌になるように仕掛けたのではないか。それはまさに権威への挑戦であり、反権力思考、反骨精神を貫いた証しからであろう。

なかにしは、昭和が終わるとすすめられて作家活動を始めた。

「僕の書く歌は昭和という時代に対する恨みの歌であり、恋しさの歌であり、満州への望郷の歌でもあった。昭和が終わって、ぼやきをぶつける相手がなくなったことも大きい」ともいい、

「歌謡曲は昭和のものだったのです。大正末からラジオ放送が始まり、軍部はそれを利用して軍歌をはやらせていく。歌謡曲を国威発揚のために使ったわけです。それが昭和という時代のインフラになった。僕らが作った歌謡曲はラジオやテレビ、レコードといった昭和のインフラの上でヒットした。平成はCDというデジタルの時代になり、さらにインターネットの時代になった。インフラそのものが変わってしまったのです。」と閉める。

平成に入り『兄弟』（一九九七年）を書き、小説家としてデビューし直木賞の本命候補となりながらも逃し、第二作『長崎ぶらぶら節』（一九九九年）で見事直木賞を受賞した。しかし、なかにしの作家としての渾身の作は、すべてをさらけ出したその後の大作『赤い月』そして集大成の『夜の歌』である。

この小説は、なかにし礼の自伝的作品であるが、直木賞受賞作よりさらに優れた作品だろう。『赤い月』を下敷きに、晩年の作となった『夜の歌』にはこの主題が共鳴しており、なかにしワールドとして結実されている。

ここには、戦争という非常時のさなか、満州国という幻想に生かされたなかにし一家の壮絶な生きざまが描かれている。その父は、関東軍の傘下で保護され、日本酒の蔵元やそのほかの事業で業績を伸ばし、成功を収めていたが、日ソ不可侵条約を破棄し当時ソ連の侵攻が始まり、日本の敗戦が近づくとや軍の撤退、逃亡により、一転栄華を築いた牡丹江から家を捨て避難、逃亡生活となる。

トンネルを抜けた逃亡列車は、で始まる詩、

石炭用の無盡車に／石炭同様の姿で

おろおろと運ばれていく／軍服をつけ武器を持っているのに

戦わない軍人たちを乗せて／卑怯列車は

身をちぢめ 声を殺して

死の影をひきながら／ふらふらと走っていく

なかにしの述懐には、満州国という幻の昭和日本の興亡の下に生まれ、戦争に負け、支配者が変わり勝ち誇ってきた関東軍がいち早く撤退し逃亡していく光景が少年の眼に焼き付き、純粹な感情で戦争を告発する憤怒、そして逃亡は卑怯者だという国への不信感の証しが、その後の昭和歌謡の恋歌に秘匿されたはやり歌となり、さらに直木賞以後の名作へ

昭和が生んだ、なかにし礼

と続き、生きていくために仮託された自己存在の心の掟となったと思う。昭和の辛酸を舐め、人生の裏表に生かされたなかにし礼の矜持でもある。

昨年末に亡くなったなかにし礼さんのご冥福を心よりお祈りいたします。